

学位授与番号：甲 1086 号

氏 名：柴田 陽子

学位の種類：博士（医学）

学位授与日付：平成 30 年 11 月 28 日

学位論文名：

Japanese citizens' attitude toward end-of-life care and advance directives: A qualitative study for members of medical cooperatives

(終末期医療と事前指示書に対する日本の地域住民の意識について：医療生協組合員を対象とした質的研究)

学位論文審査委員長：教授 下山直人

学位論文審査委員：教授 岩楯公晴 教授 矢野真吾

論文要旨

氏名	柴田 陽子	指導教授名	松島 雅人
<p>主論文</p> <p>Japanese citizens' attitude toward end-of-life care and advance directives: A qualitative study for members of medical cooperatives (終末期医療と事前指示書に対する日本の地域住民の意識について:医療生協組合員を対象とした質的研究)</p> <p>Yoko Hirayama, Takashi Otani MA, Masato Matsushima Journal of General and Family Medicine. 2017; 18: 378-385.</p> <p>要旨</p> <p>【背景】</p> <p>日本の地域住民は、自分自身の終末期医療を選択することに興味を持っているが、事前指示書を作成しているものはほとんどいない。本研究では、地域住民の終末期医療に対する態度と事前指示書に対する態度と、これらの態度に影響を及ぼす要因について探索的に調査した。</p> <p>【方法】</p> <p>2009年および2010年に48人の参加者で5つのフォーカスグループを実施した。すべての参加者は東京の医療生活協同組合の組合員であった。分析はSCAT (Steps For Coding and Theorization) を用いて行った。</p> <p>【結果】</p> <p>我々は、事前指示書を作成する上での多くの障壁と促進因子を見出した。「死にゆく家族の看取り経験」や「自分自身や周囲の重大な病の体験」は事前指示書に対する態度に良い影響を与えていた。「文書化することの煩わしさ」「死や重大な病に直面することを避けようとする態度」「治療方針決定における他者依存の姿勢」「疎遠な家族関係」は事前指示書記入の障壁となっていた。一部の参加者は、最初は記入に消極的であったが、グループでの議論や、自分の事前指示書の記入を通じて、終末期医療への態度を変えていた。</p> <p>【結論】</p> <p>事前指示書を書くにあたって、その患者の過去の介護経験や病体験を聞くことは助けになるかもしれない。他者の病体験について聞いたり、事前指示書について学んだり、実際に記入してみたりすることでこの文書を書くことへの障壁をなくすることができる可能性が示唆された。</p>			

学位論文審査結果の要旨

柴田陽子氏の学位請求論文は、主論文1篇、参考文献2編よりなり、主論文のタイトルは「Japanese citizens' attitude toward end-of-life care and advance directives: A qualitative study for members of medical cooperatives」で2016年に *Journal of General and Family Medicine* 誌に発表されている。

Thesis のタイトルは「終末期医療と事前指示書に対する日本の地域住民の意識について：医療生協組合員を対象とした質的研究」である。

平成30年10月26日（金）に岩楯公晴教授、矢野真吾教授両審査委員の出席のもと、公開学位審査を開催し、柴田氏による研究概要の発表に続いて口頭試問を実施した。口頭発表後のいくつかの主な質疑内容について報告する。

質問1：事前指示書を記載してもらうために、良好な対象、タイミングはあるのか

回答：自分で重病を経験したことがある方の方がためらいなく記載できているし、心の準備ができていられる方が記載してもらいやすい

質問2：この研究から何がわかるのか

回答2：約10年前に行なわれた研究にくらべ、事前指示書に対する関心が著しく高まっていることから、今後、継続して本研究が行われていくべきであること、意識の変化をみていくことが重要

質問3：本研究は2009-2010年に行なわれたものであるが、古い結果ではないか

回答：指摘の通り、古い結果であるが、経時的に調査することが必要であり、現在も研究は継続されている。また、新たに Advanced care planning (ACP) という概念が入ってきており、その辺も加味しなければならなかったため、研究の練り直しが必要であった

質問4：事前指示書は living will と同義語であるか

回答：本邦ではほぼ同義語で使われている

質問5：今回の質的研究にあたって、フォーカスグループのフォーカスは適切であったか

回答：フォーカスグループは意図的にグループを集めるという意味ではなく、ボランティア的に集まってきた住民にテーマを与え、それについてのディスカッションを行いながら情報収集していく方法であるので、適切であったと考えている。

多くの質問についてのディスカッションがあり、それに対して申請者は丁寧に、他の研究結果をあげながら回答した。

口頭審査後に、岩楯、矢野両教授と慎重に審議し、日本のある地域における事

前指示書に対する考え方を調査し、事前指示記載に関する要因を詳細に検討した論文で、学位を授与するに十分な価値があると認めた次第である。審査後に Thesis にいくつかの文言の修正を指示したが、それについて適切に修正されていた。尚、質疑において、どのような質問に対しても、丁寧に、根拠をもって答えていた点は特筆すべきであるという審査委員の意見があったことを付け加える。